



Title	〈図書紹介〉岩城見一編『芸術/葛藤の現場』
Author(s)	渡辺, 眞
Citation	デザイン理論. 2002, 41, p. 139-140
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53309
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

岩城見一編『芸術／葛藤の現場』

シリーズ・近代日本の知 第4巻

晃洋書房 2002年

渡辺 眞／京都市立芸術大学

本書は、「近代日本の知」シリーズの一巻として企画されたもので、哲学、政治、倫理、芸術、宗教という5領域5巻からなるシリーズの芸術を担当したものである。このシリーズは、

……西洋の知の受容の上に築き上げられてきたわれわれの文化もまた一つの壁に突き当たっています。

……そのような状況の中で、日本の「近代」を振り返り、その歴史の意味を考えることは大きな意義があるのではないかと思います、この企画を立てました。

という刊行意図を背景に実現されたもので、本書の意義もそこにある。『芸術／葛藤の現場』という書名となっているが、芸術実践の問題よりも、芸術をめぐる思索つまり美学や美術史、芸術学といった学問の領域における動向が主たる問題となっている。「美術」や「芸術」という観念自体が、「西洋の知の受容の上に築き上げられてきたもの」であり、それが壁に突き当たっているのであるから、その受容、成立の時点に遡って問い直してみようという試みである。

第Ⅰ部「近代芸術意識の成立」では、明治以前の芸術家像を問うことから始めて、明治期における「美術史」および「美学」の成立状況が具体的に辿られ、第Ⅱ部「芸術における西洋と東洋」では、矢代幸雄の活動、大礼記念京都美術館と展覧会、1910年代から20年代にかけての京都における美術批評など、当時の現場の動きが明らかにされ、第Ⅲ部「日本近代芸術意識の諸問題」では、彫刻家の橋本平八と円空の関係や工芸家の黒田辰秋など

が取り上げられ、第Ⅳ部「アジアにおける日本美術」においては、韓国、台湾、中国の研究者によって、戦前戦中の日本の植民地政策下での美術活動のあり様、また日本で翻訳語として生まれた「美術」や「芸術」という用語の中国での受容などの問題が扱われ、第Ⅴ部「京都学派と芸術」では、京都学派における「自然」や「芸術」概念の問題、和辻哲郎の『古寺巡礼』、三木清における哲学、美学、文芸批評の関係などが問われている。

本書に寄稿している意匠学会の会員は、吉竹彩子、永井隆則、岩城見一の3会員である。

吉竹会員は、第3章「近代工芸の側面」の「黒田辰秋と木の工芸」を担当している。黒田は、木工芸の作家として知られているが、漆工芸の分野でも同等の仕事を示している。吉竹会員は、黒田の創作の歩みを辿りつつ、木工芸に対する特別の感情と、木工芸と漆工芸が交錯する関係について論究している。

永井会員は、第Ⅱ部第三章「1910-20年代京都の美術批評と芸術論」と題して、京都生まれで、東京大学哲学科を卒業し、京都市立絵画専門学校で美学美術史を教えた中井宗太郎や、同じく京都に生まれ京都市立美術工芸学校を中退し、フランスのアカデミー・ジュリアンにも学び、批評家として活躍した田中喜作や洋画家の黒田重太郎などを中心にし、これに日本画家の土田麦僊や小野竹喬他、さらに京都大学の植田壽蔵、深田康算など、作家、批評家、美学者が活発に交わりつつ、刺激あった様子を明らかにしている。

「無名会」「シャ・ヌアール」「ル・マスク」など田中や中井を中心にし、日本画家や洋画

家も参加した研究会の設立、中井を中心に発刊された雑誌『制作』での美学者の寄稿や国画創作協会の画家たちによる表紙のデザインなど、現場の動向を追いつつ、同時に中井宗太郎たちの「人生派」的な芸術論、京都学派の「人格主義」そして黒田重太郎に代表される「造形的特質論」など、当時の芸術論の流れが論及されている。

岩城会員の第Ⅴ部第三章「三木清の文芸論」では、三木における文芸批評、哲学、芸術論の相互作用と展開が問題にされ、また戦中の日本中心の「東亜思想」とのかかわりが論じられている。まず、当時の文芸界における「プロレタリア文芸」と「芸術派」の対立を批判し、「新ヒューマニズム」の文学を提起する三木の文芸批評活動を論じ、この「新ヒューマニズム」という思想は、ドイツの文芸理論の批判に始まって歴史批判に至った「有機体説批判」に基づくものである、というように三木の思索過程を解き明かす。

その中心は、

だから「歴史的人間」の哲学は、「理解」する存在、「解釈学的」存在としての「人間学」ではなく、「行為的」、「表現的」存在としての「人間学」でなければならない。

という人間を「表現的存在」として捉える考え方であるが、これに対する西田幾多郎および西田を介して学んだフィードラーの「芸術的表現」の理論の影響について論じ、最後に三木および京都学派の哲学、美学に内在する問題点として、

三木の理論も、京都学派を特徴づける、広義の「超越論的立場」とどまっておらず、このため、「ネオヒューマニズム」の文芸の必要は要求できても、それがいかなる姿をとるかは全く無規定のままに残される。

と結論づける。

3 会員および本書全体が直接デザインを対象にはしていないが、「西洋の知の受容の上に築かれた文化」という点では、デザインも同じ問題を抱えており、しかも領域的な近さから言えば、多大な影響を及ぼす内容を含んでおり、直接、間接に教えられる事の多い書である。